

<研究成果の紹介>

三重県東紀州地域における亜熱帯性果樹アテモヤの栽培

農業研究部紀南果樹研究室

1. 成果の内容

本県東紀州地域はカンキツ類の栽培が盛んですが、近年の経済の停滞や供給の過剰基調等により、農家経営は厳しい状態が続いています。そこで、農家経営の補完品目の一つとして亜熱帯性果樹のアテモヤを取り上げ、栽培適応性や栽培方法について検討しています。

アテモヤはチェリモヤとバンレイシの交雑種としてオーストラリアで発見されたもので、果肉が白色クリーム状でジューシー、甘さの中にほんのりと芳香があり「森のアイスクリーム」と称されています。日本では沖縄県や鹿児島県の離島と静岡県で栽培されていますが、生産面積は約7ha程度です。

以前、当短報によりアテモヤの品種‘ピンクス・マンモス’と‘ヒラリー・ホワイト’は当地で冬期の加温ができるハウス施設であれば、充分栽培できることを伝えました。しかし、若木での試験事例であり、成園での収量性が明らかではありませんでしたが、樹齢が7年生となり樹冠がほぼ100%となった現在で、10a当たり約1.0~1.4トンの収量を得られることがわかりました(図1)。平均果実重は‘ピンクス・マンモス’で600~650g、‘ヒラリー・ホワイト’は350g前後でした(図1)。なお、‘ピンクス・マンモス’では最大1600gにもなっています。

また、当研究室ではアテモヤに平棚栽培を採用しており、これに適したせん定方法を解明するため、母枝の切り返し程度について検討しました。その結果、母枝の切り返し程度は、短梢(基部から2-3芽で切除)、中梢(12芽程度で切除)、長梢(24芽程度で切除)いずれも結実率や果実品質には大きな差が見られず、発芽率や着花率は短く切除するほど高いことがわかりました。このことから、樹冠拡大時以外は発芽率や着花

が多く、棚面での母枝の配置が容易で作業も効率的である短梢及び中梢せん定を基本とし、適宜使い分けることがよいと考えられました。

さらに、アテモヤの収穫適期を明らかにするため、樹上着生日数と追熟性との関係について検討しました。その結果、‘ピンクスマンモス’及び‘ヒラリーホワイト’はそれぞれ受粉後130日及び140日以降になると正常に追熟するとともに、果皮表面の黄化が目立つようになります。それ以後も樹上着果させた場合は両品種とも果実重が増し、果肉の香りや果汁が増加するなど果実の商品性が高まることわかりました(表1)。

2. 技術の適用効果と適用範囲

アテモヤは加温が可能な施設があれば、県内のほぼ全域で栽培できると思われませんが、温暖な東紀州以外の地域では冬期の加温に多くの燃料費が必要となります。せん定は短梢せん定が活用できるので技術の習得も容易であると考えます。さらに、結実した果実の受粉時期を記録すれば、樹上着生日数から出荷開始可能な時期が把握でき、計画出荷の参考になります。

3. 普及・利用上の問題点

アテモヤは亜熱帯性果樹であることから、冬期は最低気温3℃以上に管理する必要があります。

平棚栽培の7年生樹で10a当たり収量が1.0~1.4トンと低く、結実率の向上や新梢管理による棚面の有効利用を図る等、増収技術の開発が必要であると考えます。



(須崎 徳高)

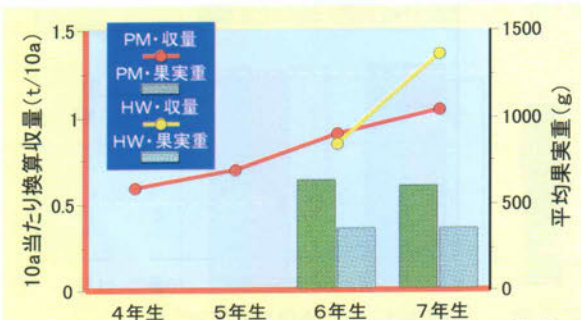


図1 アテモヤ品種の樹齢と収量、果実重の推移
注)PMは‘ピンクス・マンモス’の略、HWは‘ヒラリー・ホワイト’の略
‘ヒラリー・ホワイト’の4~5年生データは未調査

表1 樹上着生日数と果実品質 ‘ピンクス・マンモス’

樹上着生日数	果実重 (g)	糖度 (%)	酸含量 (%)	果実硬度 (kg/cm)	果肉の状態	果汁	香り
100日	154.6 c	12.4 b	0.45 a	0.49 a	2.9	1.9	2.3
120日	280.9 bc	16.3 a	0.38 ab	0.32 b	3.0	3.0	2.9
130日	391.1 ab	17.2 a	0.35 b	0.32 b	3.7	4.1	3.9
140日	421.3 ab	17.6 a	0.40 ab	0.27 b	4.0	4.4	4.4
150日	498.7 a	17.2 a	0.28 c	0.26 b	4.4	5.0	4.3

有意性 ** ** * ** - - -
注)果肉の状態は下記の基準で調査
肉質:硬い←5クリーム状、果汁:少1←5多、香り:少1←5多